

|||||
 書評・紹介
 |||||

内田和子著『近代日本の水害地域社会史』

古今書院 1994年 276p.

著者は早稲田大学卒，都立高校教員として兵庫教育大に内地留学して修士課程終了，文学博士，現在岡山大学教授。

表題をみると歴史の本のようであるが，本書は河川沿いの低地，すなわち水害常習地に成立した社会組織である水害予防組合について，その変遷の地域的特色をみた地理学書である。日本の低地は農業の根幹をなす米作地帯であり，灌漑・排水は最も重要な問題で，地理学でも農業，集落の分野で水利組合のことも含めて多く扱われてきた。また，沖積低地の地形や水害の調査も多い。大河川については国の直轄河川として治水対策事業が行われてきたが，中・小河川流域では水害予防組合が治水にあたってきた。著者は地理学の立場からはじめてこの水害予防組合を本格的な研究主題としてとりあげた。

本書は序章，前編4章，後編5章，終章からなる。序章では目的として，日本の近・現代における水害予防組合の展開課程とその地域的特色を分析し，治水事業の進展に果たした役割を明らかにすること，方法として，水害予防組合が4つの機能をもつ（1. 工事費の地元費用負担，2. 水防活動，3. 用排水事業の推進，4. 事業実現・充実活動）とし，各々について代表的事例地域を5つ選定し，主な活動時期，自然条件，居住・生産形態・土地所有等の特性の相違をみ，地域分析を行ったことを述べている。

前編は「日本における水害予防組合の展開課程」で，第Ⅰ章 水害予防組合の法的根拠，第Ⅱ章 水害予防組合の設立をめぐる治水・利水組織の検討，第Ⅲ章 水害予防組合の諸機能と治水・利水事業の検討，第Ⅳ章 水害予防組合の組合数と分布の推移，から成る。日本における水害予防組合の展開課程，組合設立の経緯，変遷について概観し，組合の機能を分類し，背景となった時代の政治・経済体制，農業行政，治水・利水の技

術，地域社会の構造についてもふれている。

後編は「日本における水害予防組合の地域的特色」で，第Ⅰ章 府県営改修事業の成立を規定した地元費用負担の賦課方式，事例は新潟県佐渡郡国府川水害予防組合地域，第Ⅱ章 地域に継承された水防社会，事例は岐阜県大垣輪中水害予防組合地域，第Ⅲ章 用排水事業の推進による農業基盤の確立，事例は新潟県西蒲原郡上郷水害予防組合地域，第Ⅳ章 府県営改修事業の推進と治水事業の支援システム，事例は兵庫県水上郡佐治川水害予防組合地域，第Ⅴ章 都市化に起因する水害予防組合の解体過程，事例は神奈川県鶴見川水害予防組合地域となっている。

いずれも地形の特性，流域の地形分類図，洪水の特性をのせ，自然条件を明らかにし，水害予防組合の設立，活動の経緯，賦課金，歳入・歳出などの資料から，組合の地域へのかかわり方を考察している。時代的には近世から現在まで，地域的には過疎地から都市地域まで変化のある事例を取り上げている。しかし，自然条件，歴史的，経済的，社会的背景が異なるごとに社会組織としての水害予防組合も異なってくるのではないか。

調査方法としては，膨大な組合文書，各法律を読みこなし，統計，ボーリング資料，洪水関係資料を探し，新たな統計を作成したり，従来の研究に欠けていた所を明らかにしたフローチャートを作成したり，地形図や空中写真判読により地形分類図を作成している。特に新しい手法を用いているわけではないが，自然・人文の広範囲にわたる参考文献を総合し，問題点を掘り下げ，データで納得させている。ただ資料は行政側，組合側のもので，その地域の農民，住民の立場や考え方は全くはいっていない。

本書は1992年，立正大学に提出した学位論文およびそれ以前に地理学評論，人文地理，地学雑誌，水利科学等に掲載された論文を骨子としているため，教科書的な読みやすさはないが，序章，終章に要約をのせるなど，整理されている。治水と利水，低地の地形と社会組織を併せ，地形・地

質・水文の自然地理分野と社会・歴史・農業・集落の人文地理分野の境界・複合領域を扱った労作といえよう。

(瀬戸玲子)

岡田久美子著『岡田久美子写真集・フィールドノート余滴』

私家版(BeeBooks), 変形版172×184mm, 1993年60p.

「お茶の水地理」に、書評・紹介欄を設定することになったそうで、その第1回目に本書を取り上げることができたのは偶然かもしれないが、必然であったのかもしれない。すなわち、本書が発行されたのは1993年で、教室に寄贈されたのが1994年であり、この頃からお茶の水地理学会会報(NewsLetter)に会員の著書等の紹介を系統的に行うようになっていたが、受領した評者がタイミングを失し、NewsLetterの発行を続けて見逃したところ、多少スペースに余裕のある本欄がスタートしたので本文となったわけである。お茶の水地理学会会員の出版活動を紹介することが最も適切な本欄に、本書が最も適切な出版物の一つであることは疑いあるまい。

表紙カバーの袖に序・跋に相当する文章を配置し(従って、この部分は総頁数には含まれていない)、巻頭と巻末にはフィールドノート余滴的なソフトフォーカスの背景写真に重ねて旅に関わる題材の二首が配されている。序によれば、地理を志して以来のフィールドノートに対応する写真とフィールドノートの行間から滴り落ちた言葉を蒐めたものが本書であること、跋にはフィールドへの想いが簡潔に述べられている。

本書の中心部分は、写真とその説明が配列された頁数にして57頁の部分である。写真の配列及び題材ないし撮影地は、川(アマゾン)・沼(鬼怒沼)・滝(イグアス)・湖(バイカル)・霧(明神池)・海(コリント運河, 竹富島)・渦(鳴門海峡)・港(ハンブルク)・野(飛火野)・草(モンゴル)・峠(ネパールのカスキコット)・山(マチャプチャレ, モンテローザ)・砂(モロッコのメルズーガ砂丘)・上(内モンゴルの煉瓦, ペルーのアドベ)・樹(カナダ, 水上高原)

・橋(モンゴルのオルホン架橋)・童(ベルリン, ネパール)・街(モロッコのフェズ)・市(ベルゲン, クスコ)・衣(モロッコのジュラバ, シベリア)・食(セイシェル, プエノスアイレス)・住(バンクーバー, モンゴル)・獣(モンゴル, ケニア)・窓(ノルウェーのグreekの家)・庭(兼六園)・春(長谷寺, 千鳥ヶ淵)・夏(小笠原諸島)・秋(上越, 上信国境の紅葉)・冬(網走の流水)である。最終項1頁を除く28項は各々見開き2頁に1~3葉の写真が掲載されている。地理学的記録であるフィールドノートに対応すべき写真集という面目を維持しながら、時々著者自らが登場したりして、フィールドノートの余滴たる私家版の面目も維持する。

本書の紹介は写真技術的立場から、あるいは地理資料としての写真のあり方を論ずる立場から行うことも可能であるが、以下やや異なる角度から紹介を続けることにする。

説明については、写真に対する著者の豊かな思い入れが記され、フィールドノートの行間から言葉が何時滴り落ちたかは必ずしも明かではないが、それだけ魅力的なものとなっている。二三の例を挙げれば、竹富島の貸し自転車屋で鍵を借りようとした話、ベルリンの小学生の写真撮ることの諒解を得ようとしたら先生は整列させようとするが小学生は当然整列しなかったらしいこと、短かな文章であるが似た体験を持っていればその頁にしばらく見入ってしまうことになる。この感覚は俳句で得られるものに似ている。世の中の実相の一端を17文字で表すことと、時空間四次元の世界を一瞬の二次元平面に固定することには、自らの視角を凝縮できるという錯覚に共通するところがあるのではないか。戯画化された日本人観光客像にカメラが必ず附属品になるほど日本人がカメラを持つのは、庶民まで行き渡った俳句の伝統に基づくに違いない。

話が技術論から離れると容易に拡散することの実例のような文になったので、ここで本誌に適する視点に変える。地理学徒の旅はこういうものであることがまさに一目瞭然である。すなわち、特定のテーマを持ってする旅であれば、こういう形の写真集は有り得ない。単なる旅好きが写真機を持って歩いてもこういう形の写真集をまとめることは不可能だろう。あるいは単なる写真機好き